

参加アーティスト (一部)



参考作品 | From the exhibition "No Limestone, No Marble" "The Quiet Before the Storm" 2022  
Photo by Clare Britt



参考作品 | Serendipity / 2023

ネリー・アガシ / Nelly Agassi

1973年イスラエル生まれ、シカゴを拠点に活動。パフォーマンス、インスタレーション、ビデオ、アニメーション、テキスタイル、紙作品など多分野で活躍する。主に物質、身体、空間を扱う作品が多く、建築と関連した公共空間に関心がありサイト・スペシフィックな作品も制作する。作家自身の個人史や人生経験から紡がれた「脆い糸」を通すことによって、場所の記憶や歴史の断片を炙り出そうとしている。作品はグラハム財団シカゴ、シカゴ文化センター（シカゴ・ルーム）、イスラエル博物館、テート・モダン、テルアビブ美術館、ミラノ・トリエンナーレ、ザヘンタ国立美術館（ワルシャワ）などの施設やギャラリーなど各国で展示されている。非営利団体Fieldwork Collaborative Projectsの共同設立者で、2019年度グラハム財団フェローでもあり、作品は国内外の美術館や個人コレクションに収蔵され、近年ではシカゴ美術館に収蔵された。今後はフォクサル・ギャラリー（ワルシャワ、2023年秋）、ORD T5委託プロジェクト-シカゴ・オヘア国際空港ターミナル（2023年夏）での個展が予定される他、グループ展ではPola Magnetyczne（ワルシャワ、2023年秋）、国際アート見本市ウィーン・コンテンツボラリー（2023年秋）等が開催される。Dvir Gallery（テルアビブ）、Pola Magnetyczne（ワルシャワ）ギャラリー所属。

清川 あさみ / Asami Kiyokawa

1979年兵庫県淡路島生まれ、東京を拠点に活動。90年代より雑誌の読者モデルとして注目を集め、2000年代には文化服装学院にて服飾を学びながら、「ファッションと自己表現の可能性」をテーマにアーティストとしての創作活動を開始。2001年に初個展「SAUCE」を開催して以来、国内外で多数の展覧会を開催し、その活動は常に高い注目を集める。ソーシャルメディアや雑誌などのメディアシステムを通して日々膨大な情報を晒される社会で、個人のアイデンティティの内と外の間を生じる差異や矛盾に焦点を当て、可視化する。写真や雑誌、本や布に刺繍を施す独自の手法を用いた作品でよく知られ、代表作として「美女採集」「Complex」「TOKYO MONSTER」などのシリーズがある。近年は表現・活動の領域を広げ、衣装、広告、映像、空間、プロダクトデザインなどのクリエイティブに携わるとともに、絵本の制作や地方創生事業にも取り組む。



参考作品 | ©Axel Vervoordt Gallery and Artist



参考作品 | Braiding to Connect at Industrie Museum Gent by Fransje Gimbrère x Soft Connection Lab.



参考作品 | installation view from anthology at Hagi Uragami Museum, 2020 © Junko Oki, Photo by Yasushi Ichikawa

ジェファ・ラム / Jaffa Lam

1973年中国生まれ、香港を拠点に活動。主にリサイクル素材を使ったミクストメディアの彫刻やインスタレーションなど、サイトスペシフィックな大規模作品を得意とする彫刻家。土地の歴史、文化、時事問題に関連する問題を探索する非言語的な会話や対話に関心を持つ。パブリック・アート、伝統工芸の喪失と再生、人間とモノの循環、一見些細な人間の物語を歴史の大きな流れの中にとらえるようなテーマについて考察している。瀬戸内国際芸術祭（2013年）、台北当代芸術館の「香港ウィーク」（2015年）、デンマークのアロス・オーフス美術館の「A New Dynasty- Created in China」（2015年）など多くの国際展に招待されているほか、世界各国のアーティスト・レジデンス・プログラムにも参加。直近では2023年アート・バーゼル香港のエンカウンターズ・セクターで、宙を舞う大型のインスタレーション作品を出品。傘の生地を再利用した14メートルのパッチワークと工業用押し車で作られた6つの椅子から構成され、労働・アイデンティティ・都市の集団性の問題を提示した。

フランシェ・ジムブレレ / Fransje Gimbrère

1993年オランダ生まれ、オランダ南部のaintホーフェンを拠点に活動。オランダの繊維都市ティルブルフで生まれ育ったアーティスト、研究者。2017年、手織りの立体的な空間テキスタイル彫刻「Standing Textile(s)」を発表し、アイントホーフェン・デザイン専門学校を卒業。素材・工程・色・形を丹念に研究し、人間の感性と共鳴し、身体的なものだけでなく、感情的・精神的なニーズにも応える作品を制作。また工芸の背後にある知識や知見の重要性、その価値を認識し、創作過程で工芸と産業の架け橋を築きながら、未来への革新のため、様々な産業や機関とのコラボレーションを模索。革新的な可能性を見だし、既存のプロセスに新たな視点をもたらすことを得意とする。TextielLab Tilburg、研究グループSoft Connection Lab、Knitwearlab Almere、Zuiver Groupなどとコラボレーションし、ティルブルフ市やティルブルフ大学の象徴的な記念碑作品も制作。ティルブルフの織物博物館、デザインミュージアム・ゲント、セルトヘンボス市立美術館、スコッツデル現代美術館（SMoCA）、Cuyperhuis（ルールモント、カイベルス邸）など、世界各地の美術館やギャラリーで作品が展示されている。

沖潤子 / Junko Oki

1963年浦和市生まれ、鎌倉市を拠点に活動。生命の痕跡を刻み込む作業として布に針目を重ねた作品を制作。下絵を描く事なしに直接布に刺していく独自の文様は、シンプルな技法でありながら「刺繍」という認識を裏切り、観る者の根源的な感覚を目覚めさせる。古い布や道具が経てきた時間、またその物語の積み重なり、彼女自身の時間の堆積をも刻み込み紡ぎ上げることで、新たな生と偶然性を孕んだ作品を生み出す。存在してきたすべてのもの、過ぎ去ったが確かにあった時間。いくつもの時間の層を重ねることで、違う風景を見つけることが制作の核にある。主な個展に「月と蛹」（資生堂ギャラリー、東京、2017）、「Truly Indispensable」（Office Baroque、ブリュッセル、2019）、「anthology」（山口県立秋美術館・浦上記念館、2020）、「沖潤子 さらけでるもの」（神奈川県立近代美術館 鎌倉別館、2022）、「よれつれもつれ」（KOSAKU KANECHIKA、東京、2022）など。主なグループ展に「みちのおくの芸術祭 山形ビエンナーレ 2018」（文翔館、山形、2018）、「現在地:未来の地図を描くために[2]」（金沢 21 世紀美術館、石川、2019）など。2014年には、自身の撮影による作品集「PUNK」（文藝春秋）を刊行。作品は金沢 21 世紀美術館に収蔵。また2017年に第11回shiseido art egg 賞を受賞。